

鏡物の世界
— 『唐鏡』を中心に —
(要旨)

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：D140990
氏名：李 莘梓

本論文は従来の研究で軽視されてきた『唐鏡』を論じたものである。従来の『唐鏡』研究において、本文に関わる研究はほとんど出典研究であったが、実際のところ、藤原茂範がどのような書物を材料に『唐鏡』を編成したかは不明である。たとえ『唐鏡』の記事が他の書物に見られるとしても、それだけで他の書物から引用されたと判断を下すことは困難である。そのため、『唐鏡』の出典研究というより、『唐鏡』の著者は何故『唐鏡』を編成したか、『唐鏡』はどのように編成されたかという問題を解明することが大事である。

また、『唐鏡』の成立年代については、茂範の鎌倉滞在期・茂範の出家後という二つの説に分けられたが、どれが正確かは検討する必要がある。特に、『唐鏡要文』が発見されたことを踏まえると、以前の『唐鏡』の成立論はもう一度考察する必要があると考えられる。

本論文では、ブライトウェル氏が指摘する、鏡物は一つの文学ジャンルに分ける必要があるという点を踏まえ、鏡物を一つの文学ジャンルとして分析し、『唐鏡』を考察する前に、まずは同じ鏡物という文体に属する四鏡の研究を行った。

第一章では、『大鏡』『今鏡』『水鏡』『増鏡』、いわゆる四鏡を語りの設定・歴史叙述の形式・内容で考察を行った。語りの方からいうと、『大鏡』以降の鏡物はすべて、その語りの内容に応じて『大鏡』の形式に倣い、聞き手・聞き手と語り手の両者が遭遇可能な語りの場を設けて、歴史物語を語らせたのである。

『大鏡』の場合では、語りの内容は藤原家に関わる人間であるため、語り手を藤原家・宮廷に仕える人間と設定し、語り手を藤原家の政敵を弔う雲林院の菩提講を原型に設定した。

『今鏡』の場合では、語り内容は中世文芸に関わるものであるため、語り手を宮廷に使えた老女・語り手を後白河院の春日御幸を原型に設定した。

『水鏡』の場合、二重の語りがあり、比較的に重要なのは第一の語りである。第一の語りにおいて、語り手を葛城山、語り手を翁に設定した。葛城山から翁の身分を考察すると、翁は役行者の縁者で、一言主神を原型に設定されたことがわかる。仏教の信者・一言主神という二つの要素を持つ語り手は日本の神武天皇から仁明天皇の歴史を語るということを果たした。

『増鏡』の場合、語り内容は王朝文化・法王国家の復活であるため、語り手を嵯峨の清涼寺に設定した。嵯峨の清涼寺に、一条天皇の時代に奄然が中国から持ち帰った釈迦如来像があり、この如来像は王朝国家を守護するための存在である。そこで、『増鏡』の王朝文化を復活する歴史観が窺える。

四鏡を考察することによって、鏡物の特徴が明らかになった。それは、序文で語りの内容に応じ、語り手・聞き手・語り手を設定し、口述の形で歴史を記述したことである。本論文の研究の中心である『唐鏡』も序文で語り手などが設定されたが、その語り手も語り手の内容と深く関わっている。その上、四鏡は日本の歴史を話題に

したのに対して、『唐鏡』は中国の歴史を話題にした。その理由を分析する必要があると考えられる。

第二章では、茂範の生涯と『唐鏡』成立年代を考察する。

第一節では、『唐鏡』の著者に纏わる先行研究の諸論を考察し、藤原茂範を『唐鏡』の作者だと断定した。続いて、茂範の系譜を簡単に紹介した。また、茂範の生涯に関わる史料を集めて、彼の人生を分析した。漢学者としての茂範の漢学のレベルが高いこと、葉室家・広橋家との親交がわかる。その上、次の通りの事項も窺える。

- ①年少時に及第したこと
- ②茂範の不遇と父である経範の推薦による任官
- ③宗尊親王の師範に任じた後、鎌倉での活躍
- ④鎌倉での成果が評価され、朝廷にも重用されたこと

しかし、茂範の生涯の記事を通じて、『唐鏡』の成立年代を推定する手がかりがない。そのため、第二節では、先行研究の論説を踏まえ、『唐鏡』の序文・新しく発見された『唐鏡要文』を通し、『唐鏡』の成立年代を分析した。『唐鏡』の序文の記述の真実性を疑うことから、序文から成立年代の推定は不可能であると判断した。続いて『唐鏡要文』と古典文庫本『唐鏡』・松平文庫本『唐鏡』との比較によって、日蓮が抄写した当時に『唐鏡』はまだ六巻まで完成したことから、茂範が制作した『唐鏡』の成立年代は日蓮と交流が可能な鎌倉滞在期以降（1264年以降）から本朝書籍目録の成立時までであることが推定した。さらに、六巻本である古典文庫本『唐鏡』・松平文庫本『唐鏡』の成立過程をも推測した。

第三章では『唐鏡』本文を考察する。

第一節では、四鏡と『唐鏡』の序文に記載された書名の由緒から書名に付けた「鏡」の意味を分析した。特に、この節で注目したのは『大鏡』と『貞観政要』、『今鏡』と『百鍊鏡』との関係である。この考察を通じて、鏡物の「鏡」は『貞観政要』の「歴史を鏡にする」意識と『百鍊鏡』の「人を鏡にする」意識に影響されたことが明らかになった。

第二節では、『唐鏡』の語りの場である大宰府安楽寺の実際状況を分析した。また、実際に大宰府に行ったことのない茂範は大宰府、ないし、安楽寺の情報を手に入れるルートを考察した。大宰府や安楽寺に纏わる公文・日記・文学作品を通じて、安楽寺は九州地方だけではなく、全国に権力を及ぼした権門寺社である上、菅原道真の加護があり、漢文学の聖地でもあることが窺える。

第三節では漢武帝の話の話題、第四節では『唐鏡』における漢詩文を分析し、『唐鏡』が中国の歴史を軸に日本の歴史を入れることで、両国に共通している漢字文化圏の歴史を築き上げ、そこに日本・中国を位置づけようとしたことを明らかにした。また、中国の話を漢籍以外の俗説・仏典で語られた概念で解説したことで、中国に存在しない中国の架空の歴史を日本で作ったという『唐鏡』の編集意図が明らかになった。

第五節では四鏡に記載された「唐」・「唐土」を考察し、日本で高まった「唐」への関心度は当時の日中交流によるものであると解釈した。両国の僧侶・中国の承認を通して、中国の書籍が日本に流入し、両国の貿易が日本の政治にも影響を及ぼしたという当時の時代背景を紹介し、『唐鏡』がこのような時代背景において、日本人の中国を知る心理要求によって制作されたという結論を付けた。

本論文では、四鏡と『唐鏡』の研究を通して、鏡物という文体、『唐鏡』の成立過程・編集意図を考察した。鏡物は口述で歴史物語を記録する文学作品であり、歴史や歴史を語る人を鏡にして現在の人や将来の人に見せるという意味が明らかである。その中に、『唐鏡』は中国の歴史を中心とし、日本の話を入れながら、当時の漢字文化圏の様子を記録した。その中に、中国・日本をそれぞれ位置付けられて、日本人の自意識・対中国意識が窺われるのである。

